

後 書 き

北海道方言研究会事務局長 佐々木 冠

前回叢書第6巻『「生活語の世界」北海道方言研究会40周年記念論文集』を刊行したのが2014年10月。10年あまりの歳月が経ちました。このたび叢書第7巻『「生活語の半世紀」北海道方言研究会50周年記念論集』を刊行することができたのはひとえに会員と読者の支援の賜です。

この10年の間に日本語の方言を取り巻く状況も大きく変化しました。柴谷方良氏と影山太郎氏が編者を務めるムートン社の Handbook of Japanese languages and linguistics シリーズの琉球語の巻 Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use (パトリック・ハインリヒ、宮良信詳、下地理則編) が2015年1月に刊行され、2025年1月には本土方言と八丈語を扱った巻 Handbook of Japanese dialects (木部暢子、新田哲夫、佐々木冠編) が刊行されました。他にも日本語の方言を扱った複数の文献が外国語でも刊行されるようになり、日本の方言研究が国際的に発信されるようになりました。日本国内で刊行される文法研究の文献でも方言の文法特徴に言及するものが増えてきたように思われます。国立国語研究所も精力的にウェブページで日本語方言についての研究成果の発信を行っています。危機言語データベースに登録された談話や語彙集、そして学術情報リポジトリの危機言語調査報告書には日本全国の様々な地点の記述的研究が公開されており、無料でアクセスできる情報が確実に増えています。

日本語の方言の研究だけでなく日本語の方言そのものも変化しているはずです。このような問題意識のもと、北海道方言研究会では2015年度に約半世紀ぶりに増毛町で大規模な調査を行うことを計画しております。共通語化、標準語化と呼ばれる現象があり、伝統方言の要素が衰退している側面もあるかもしれませんが、地域独自の表現が新たに生まれている可能性もあります。1977年に行われた増毛町での調査では「良かろう」に対応する「イーッショ」という表現が若年層で使われるようになったことが明らかにされています。高齢層が使っている「イカベ」と違う形式であるだけでなく標準語にもない形式です。約半世紀後の増毛町の方言でどのような変化が起きているのか、調査結果を早く公にできるよう努力する所存です。

今回の叢書には北海道方言研究会の50年を振り返る座談会を収録しました。今ほど通信手段が発達していない時代に人と人のつながりの中で研究会が形成されてゆく有様を読んでいると、北海道方言研究会を盛り上げていくのに必要なものは何かということを考えさせられます。次に叢書を刊行するまでに北海道内外の方言に関心を持つ人々に北海道方言研究会を知ってもらい、参加してもらえるようにして行きたいものです。